

第6章 吉本隆明と『思想のアンソロジー』⑥

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第六節 真実の「もの」の確認と質的「こと」化への革新

吉本は宗教のあいまいさと多義性について次のように述べる。

あらゆる宗教ははじめに荒唐無稽である。あらゆる国家が、はじめに荒唐無稽であるように。しかしこの荒唐無稽さは、いつも信仰者の恣意的な解釈をゆるすようなあいまいさと多義性をもっている。そしてこのあいまいさと多義性によって、宗教や国家はいつも知的な理念を附与することができる伸縮自在な容器に転化するといっている。大はヘーゲルのような優れた哲学者から、小はどこにでもころがっている垂インテリにいたるまで、この容器にいわば美酒を盛りこもうと志向することができることは確かである。しかし、宗教や国家はヘーゲルが試みたように、一般理念のひとつの形態というところまで普遍化して理解しえないかぎり、いつも猛毒と蒙昧を含むよりほかない。このばあいには、宗教や国家はその創始者(たち)の生活思想の質と、現実の政治的あるいは制度的権力としての質が問われる。教祖や創始者たちの生理学的な病状よりも、思想としての本質がものを言うのはこのかぎりにおいてである。(『邪宗門』巻末論文、吉本隆明、河出書房新社、高橋和巳作品集4658頁)。

既存の思想、あるいは新たに構築創造された普遍的思想の本質が、現実の世界に有効に働くか否は、宗教も政治も現実の制度的権力の質にあるという吉本の指摘は普遍的に正しい見解として注目すべきであろう。共同幻想である天皇制国家主義と同じく対共同幻想としてある現代の宗教教団の教義や理想への究極の終焉が、衣を代えてあらたな「邪宗門」を現代によみがえさせる予感が増大してきた。その前兆としてさまざまな宗教信条を盾にしたテロリズムや貧富の格差、企業汚職、政治・官僚の低落、高齢者社会への対応、科学技術への不信など、国家社会の金銭主義による混乱状況があらここにみられるようになった。そのなかでも宗教について感じられる生命力の枯渇はひどいものがある。現在、新興既成を問わず、宗教組織は、キリスト教もイスラム教も仏教も神道もヒンドゥー教も、その宗教のもつ新旧の語彙から現代特有の社会の多元化、想定外の事態に対応する概念装置を全く持っていないような気がする。不慮の出来事に対して有効にグローバルに対処できる用語や概念装置をほとんど全く生み出せていないのではないか。このことは哲学の不毛と批判されてきた事情とも全く同じである。これまでの宗教やそれに関連する哲学的な営みは、現代のグローバル化や、情報化やさまざまな社会機能による社会の多元化などは全く想定していなかったといえる。その想定外の事態に適切に対処する概念装置を、どの宗教も事実上、現時点では持ち合わせていないように思われる。

しかし、宗教は、個人と人間集団の自己認証のために、そして、連帯のために、どうしても大切なものである。連帯と相互理解のために大切な宗教が、これまであまりにも偏狭で人間を分け隔てる機能に用いられてきたことも確かなのではなからうか。この点は、たぶんど宗教も同じようなものであろう。それでも、ルター訳聖書がドイツ人の広範な民族的コミュニケーションをドイツで初めて可能にしたように、共通の宗教的語彙の共有は、民族の広範で強固な連帯を可能にするのも確かなのである。日本でも、法華経全巻は無理でも、せめて、般若心経位は共通のコミュニケーションツールにならないものかと考えている文化人もいる。江戸時代でさえ、字の読めない人のために絵心経を創りだした人さえいたのである。現代の教育水準なら、般若心経を共通のコミュニケーションツールにすることは、不可能ではないかもしれないと頑張っている仏教学者や評論家は関連した書物の出版に余念がない。世界宗教を標榜する天理教団指導者や宗教学者にはそのような強靱な意識があるのだろうか。世界の天理教化には、逆に天理教自身の世界化がまず求められるのが論理的筋道であろう。

それにしても、宗教や哲学は、本来人間の内面を担当するものなのだから当然かもしれないが、物質的狀態、物質的狀況への対処がきつとひどく不得手なのだろうと思う。この点は、唯物論を唱えていたマルクス主義も同様だった。天理教団のもっとも深刻な現代及び近未来

の問題は、国家や教団組織を担うすぐれた経営的頭脳を持つ哲学的人材の決定的欠如であり、また宗教的諸芸術の不在だという見方をする識者もいる。それが宗教や哲学の機能不全や自己の無力を経験し、それを乗り越えるなり、救済するなりできる天理諸芸術文化や「陽気ぐらし」文明が、世界で別個に同時発生する精神科医で哲学者でもあったカール・ヤスパースのいう「枢軸時代」の人類の「精神変革」が出現する前兆の「基軸時代」(歴史の切れ目、亀裂、断層)の空しさであればと誇大妄想してもみる。「枢軸時代」とは、紀元前500年頃にかけてほぼ同時に起こった世界史的・文明史的な一大エポックの時代を意味する。この時代、中国では孔子、老子に諸子百家、インドでは仏教や、ウパニシャッド哲学、ジャイナ教が成立し、イランではゾロアスター教、パレスチナではイザヤ、エレミヤなどの予言者が現れ、ギリシャではホメロス、ソクラテス、プラトン、アリストテレスらを輩出し、後世の諸哲学、諸宗教の源流となった「世界史の軸」、人類が精神的に覚醒変革した時代と理解されている。

「世界は鏡」の恐ろしさを自覚する自己の無力の気配さえ気づかないような雰囲気、現在の天理教団にも漂っているという経営学者もいる。つぎつぎに新旧教団が主催する信者獲得の諸行事の千篇一律の反復から、いかなる天理文化・天理文明を創出するかの問題は、1990年代以後日本におけるデフレーションが定着した状況下に適応するかたちで生まれたAKB48を、速水健夫は「講談社 現代新書カフェ～070～」(2010年)において、「デフレ・カルチャー」と命名したが、それはやはり娯楽であって、とても長続きする芸術文化や文明といえるものではないだろう。数量と内質を取り違えてはならないからである。

山折哲雄は『「ひとり」の哲学』(新潮選書、2016年)において、ヤスパースが戦後になって、なぜ「基軸時代」(枢軸時代)という構想を抱え込むようになったかについて、「まず第一に、それは「基軸時代」が亀裂の時代だったことにかかわる」と述べ、ヤスパースのいう「基軸時代」を人類史的展望の中から、日本列島の歴史に移し変えた場合、それは13世紀の「鎌倉」時代だという。一言でいえば13世紀の道元を筆頭に、親鸞、日蓮、法然などの「ひとり」の哲学の系譜の圧倒的な存在感である。「基軸時代」とは深い歴史の切れ目である。全世界同時に発生した相互に因果関係のない「人類的精神革命」については詳しく解説するスペースはないが、あらたな「精神革命」がおきる「基軸時代」(歴史の切れ目)が世界の政治にも宗教にもあらわれ始めかけているのではないかと。

天理教が目指す「陽気ぐらし」の理想世界は、その伝道活動において、異文化が織りなす世界の諸文明的差異(裏守護)の認識が欠落している、世界伝道も自己満足の蝸壺の掛け声だけを終始反復するだけにとどまるだけである。変転きわまりない「基軸時代」が求めるのは、やはりさまざまな現存宗教システムの勇断的改革・革新であり、「ひとり」の哲学の実践であろう。中山みきのいう海外伝道と解されている「船遊び」(『逸話篇』168)は「ひとり」の「遊山」に通底する文明的意味を隠し持っているといわたくしは考えている。「遊山」の「山」とは本来禅宗の言葉で仏教語であり「寺」を意味する。山野で美しい景色を楽しみ、「寺」では無念無想を目指して厳しい修行を得たのち、曇りのない心境になるよう他寺であらたな「公案」による「悟り」を得る修業を反復して下山する。「ひとり」の哲学の誕生である。わたくしは天理教祖がいわれた「里の仙人」のひながたの道を即座に想起した。そこには行為と並行して新たな「ことば」があったのである。

「基軸時代」の断層・亀裂を「世界たすけ」に架橋するためには、「船遊び」に隠されたまさに「ひとり」の実践哲学が求められているのである。それは、つまり真実の「もの」の確認・理解と、その実践的「こと」化を導き出す信仰者一人ひとりの決意と知力と能力の「質」と実践力にある。吉本隆明が「宗教や国家はその創始者(たち)の生活思想の質と、現実の政治的あるいは制度的権力としての質が問われる。教祖や創始者たちの生理学的な病状よりも、思想としての本質がものを言うのはこのかぎりにおいてである。」と氏の論考を結んだのは、まさにこの点にあったと思われる。